

目的 被服構成においてそでを製作する時、長さや太さは計測寸法をもとに製図されるが、腕のまがり方に合やすことは無視されている。タイトなそでの製図は、各種方式とも腕の形に合うように工夫されているが、どのような形の腕にも合うとは限らない。腕のまがり角度とそでのまがり角度の近い場合は、外観上よいそでつけができることは既報のとおりである。今回はそで型と腕の角度が合っている場合と、合っていない場合の着心地について官能検査を行ない、そで型と腕の角度の適合が必要であることをたしかめたいと考えた。また、腕の角度を知る方法として、写真計測では時間、費用とも多くを必要とするので、簡単に計測するための計測器を試作した。

方法 前報までの被検者の中から比体重大、中、小の者を選出し、それぞれの体型についてさらに腕のまがり角度大な者、小な者計6名を選出した。これらの者についてその寸法に合ったそで原型を製図し、このそでのまがり角度を3段階に変えてタイトスリーブをつくり、これを着用させてその着ごちを検討した。また試作した計測器により腕のまがり角度を計測し、前回の写真計測との比較を行なった。

結果 そで型と腕の角度が合っている場合は、そでに腕を通す時に通しやすく、また着用した感じも非常に自然である。腕をまげた時の圧迫感にも相違があり、腕の角度を知ってそでの製図をする必要のあることが分かった。試作した計測器によって計測した結果は、写真計測と全くの一致はみられなかったが、短時間に各人の腕の角度の特徴をつかむことができ、一応成功したものと考える。